

総目次

『戦闘文芸』（戦闘文芸社）

『尖銳』（日本無产派文芸聯盟）

『時代文化』（時代文化社）

『フェンスレス』オンライン版（第五号） ● 特別付録 資料1

『戦闘文芸』

戦闘文芸社発行

大正十三年六月～大正十四年四月（全九冊）

芸術考
社会 *2
遊撃隊
映画と民衆芸術
英耿
介木晃
山本伊津雄

宮浩子

47 44
50 48
50 48
〔表3〕
〔表4〕
〔表4〕
〔表4〕

嬰児漫言
街頭雜感
編輯後記
〔裏表紙〕 *3
同人 *4
〔奥付〕

ルナチャ尔斯キー
英
介木晃
山本伊津雄

50 48
50 48
50 48
〔表3〕
〔表4〕
〔表4〕
〔表4〕

第一巻第一号 大正十三年六月一日発行
創刊号

〔表紙〕 *1

戦闘文芸創刊号目次

若き人々に訴ふ（＊巻頭言）

プロレタリアートの文学と独逸表現主義の

戯曲

寸言三ツ

超特大傑作大喜劇「新潮合評」劇

工場裏人種（＊創作）

俺達の歌—conte romantique—（＊創作）

アスパラ瓦斯 英耿

西村三郎・宮浩子訳

詩 労働者

ファンタサス NO.12.

死せるリープクネヒト

真黒な小男

散弾 当るも…… 当らぬも……

農民文学に対する一考察 介木晃

41	39	39	39	39	37	36	21	11	10	9	2	1
5	5				5	5	5	5	5	5	5	〔表1〕
43	40				38	38	36	20				〔表2〕

1	〔表1〕
〔表2〕	

*1

一巻四号まで、表紙に海外著名作家等の文章が引用されている。創刊号には、「唯一の神が存在する。／無限なる内的

生命を導く為に、／又個人が／万人の生命の中に持つ分担を導く為に、／決してそれから身を転じてはならない／一つの神がある。／真理！」とある。

「八月号は予定の如く休刊する。九月号よりは、続けて、休

みなく出す。（九月号〆切は七月二十五日）」。

*2

「自分自身を解放する為に戦ひつゝあるプロレタリヤの文化は明白に限定された闘争に基く階級文化である。それはロマンチックである。それ自身激烈なるものである故に、其の形式はなやましい。／彼等の最も高き発達に達してしまつた階級、及び國は民、其の文化に於て古典的である。／

自己表現の為に戦ひつゝある階級はロマンチックだ、そして其のロマンチックは「あらしと、力」典型的特質を持つ

てゐる。衰微すべき運命にある、階級は他のメランコリー

* 4 な、幼滅的な、デカダンスのロマンティシズムを取る。
 宮浩子・介木晃・山本伊津雄・北見與志・坂田紺一郎・中
 野静・土橋佳文・佐川清親・西村三郎・英耿。

編後記 *2
 戰闘文芸創刊号を読みて
 黙殺

阪田紺一郎
 秦蓉
 北見與志
 50 50 49
 50 50 50

編輯後記 *2
 創刊号目次
 同人 *3

第一卷第二号 大正十三年九月一日發行

九月号

[表紙] *1

戦闘文芸九月号目次

闘争圈外に夢想する詩人に与ふ

芸術の「永遠」偽装より脱して

散弾 当るも…… 当らぬも……

叔母 (*創作)

働き者 (一幕)

汝の旗を守れ (*詩)

絶望の溜息 —まげしき老人のうだぐむ— (*詩) 英耿

冬 (*詩)

Paul Mayer

樂屋話

偶感

村のインテリゲンチャ —外二篇—

ある地主／村のインテリゲンチャ／村の女

裏切・売名・食倒し

街頭にて

遊撃隊

嬰兒漫言

エルнст・トルラア

[表1]
 [表2]

英耿

英耿

和田文彌

阪田紺一郎

英耿

閑散子

西村三郎訳

西村三郎

北見與志

英耿

英耿

英耿

英耿

英耿

英耿

英耿

英耿

山本伊津雄

6

15

* 1 「道を！／道を！／汝詩人よ、その道を示せ」『転変』中の
 「覚醒の促し」——編輯後記より)

* 2 「寄贈雑誌、無産詩人、巷、ワシヲノシンブン」
 * 3 介木晃・佐川清親・和田文彌・北見與志・山本伊津雄・坂
 田紺一郎・西村三郎・中野静・宮浩子・英耿(土橋佳文の
 名が消える)。

第一卷第三号 大正十三年十月一日發行

十月・綱領發表号 *発禁

[表紙] *1

戦闘文芸十月号目次

既成プロレタリア作家への言葉

戦闘文芸聯盟綱領規定草案

プロレタリア劇作家エルнст・トルラア

近代文明に対する情熱と辛苦の叫びの戯曲 *2

ビ、エイチ・クラーク、阪田・西村訳

ビ、エイチ・クラーク、阪田・西村訳

2

5

[表1]
 [表2]

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

市民の敵
(四幕)
夜明け迄
(＊創作)

弁明一つ
＊³

散弾 当るも…… 当らぬも……

津田光造氏に答ふ

クラルテ

戦闘文芸綱領発表について

三等飛行船々客

遊撃隊

黙殺

嬰兒漫言

バツトのカラに書い「た」文

不破又男君の盲勇 「トルラ一論」

編輯後記

九月号目次

同人
＊⁴

〔奥付〕

＊¹

「人間の進歩の為に於ては、／どんな力でも、／たとへ最も微弱なものであらうとも／使はずにおくべきではない。」

(婦人と社会主義)

Theatre Magazine

＊²

「弁明」つ——本誌の表紙が、文芸戦線のモホーだと云ふ方がある様だが、それは未だ「善く知る」とは云へない。白状しますが、表紙は「赤旗」のヘウセツだつたのです。諸君の方の赤と黒も「赤旗」の流れをくんだのではないの

○ ○ ○ ○ ○

北見與志	山本伊津雄	坂	29	16
英耿	阪田紺一郎	英耿	47	46
西村三郎	西村三郎	58	52	50
閑散子	英耿	53	52	50
北見與志	英耿	56	54	54
村上清	英耿	56	54	54
西村三郎	英耿	56	54	54
〔表3〕	〔表2〕	56	54	54
〔表4〕	〔表3〕	56	54	54
〔表4〕	〔表4〕	56	54	54
〔表4〕	〔表4〕	56	54	54

*⁴ 介木晃・佐川清親・和田文彌・北見與志・山本伊津雄・坂田紺一郎・西村三郎・藤波誓一・宮浩子・英耿(中野静の名がきえる)。

第一卷第四号 大正十三年十一月一日發行

十一月号

〔表紙〕 *¹

バーナード・ショオ
〔表1〕

〔表2〕

〔目次〕

エルンスト・トルラー、本郷一郎訳
〔表1〕

〔表2〕

彼の斃れたる所より出発せよ(故有島崇拝党)

〔与ふ〕 *²

英

〔表2〕

ルナチャ尔斯キーの藝術——態度及び作品

〔表3〕

英

〔表2〕

其他に就て—— *³

〔表3〕

北見與志訳

〔表2〕

一九一四年——一九二四年

エルンスト・トルラー、本郷一郎訳

〔表1〕

青年に寄語す

友よ批判せよ。而して……

吉江喬松

〔表1〕

散弾 当るも…… 当らぬも…… *⁴

英

〔表2〕

青年に寄語す

友よ批判せよ。而して……

水守龜之助

〔表1〕

小島徳彌

〔表1〕

小川未明

〔表1〕

松本弘二

〔表1〕

11 11 11 11 11 11 11 10 9

〔表1〕

田紺一郎・西村三郎・藤波誓一・宮浩子・瓜田新・英耿。

*2 一九二四年の誤記。
*3 平均年齢文戦31、戦闘21、試合結果は10対14である。

第一卷第五号 大正十三年十二月一日発行

十二月号

〔表紙〕

第一卷第五号目次 *1

リベルタンか？ 非ず！

童話論

一九四二年のプロレタリア文芸 *2

写実主義的戯曲より先駆的浪漫主義戯曲へ

――一九一四年戯曲界及び劇場の検討――

散弾 当るも…… 当らぬも……

怠業・革命・こけおどし

糸明 米の飯が (*創作)

「文芸戦線」対「戦闘文芸」野球戦記 *3

勇士（一幕）

新年号予告

編輯後記

〔奥付〕

〔広告〕 「文芸戦線」十二月号
希望閣「ロシアに入る」他

*1 表2は白紙。

〔表紙〕

戦闘文芸一月号目次

我が世の姉妹に

女性解放運動の方向と文学

「不聰明」なる者

婦人雑誌の立見

ロシヤを歌へる――女流詩人の作二つ――

赤い花

断章

町の人々へ (*詩)

行進序曲梗概 (*創作)

散弾 当るも…… 当らぬも……

聚楽座の「超人俱楽部」を見る――藤井真澄

氏に与ふ――

出かしたり高群逸枝

文芸病理学応用講座
黒い部屋の女（争闘の序曲） (*創作)

血迷ふたりカメネフ

女性は生きる――第二十世紀の女性に与ふ――

〔表紙〕

西村三郎

山本伊津雄

西村三郎

山本伊津雄

北見與志

瓜田新

今野賢三

和田文彌

阪田紺一郎

30 30 30 30 18 17 12 9 8 6 4 3
〔表3〕 〔表4〕 30 30 30 30 29 17 9 7 5 3 2

〔表紙〕

西村三郎

尾瀬敬士訳

西村三郎

A 英耿

エヌ・アンタコリスカヤ

エヌ・ラゾロワヤ

瓜田新

佐藤進太郎

先登医学博士

山本伊津雄

28 27 21 19 18 17 14 12 11 9 8 4 3
〔表2〕 〔表1〕 28 27 21 19 17 13 10 8 6 5 3 2
31 27 10 19

世相

勞農の詩 ワレーリー・ブリューソフ (一篇)、

ピヨートル・オレーン (二篇)

ダヴィスト駄弁

いたちごつ

思想戦・文芸戦

老いた若い娘 (一幕)

編輯後記

〔奥付〕

(広告) 紅玉堂書店 「表現派戯曲集 生血の壺」

(広告) 希望閣 「ロシアに入る」 他

山本伊津雄

阪田紳一郎

英耿

大正十四年四月一日発行

四月号

〔表紙〕

戦闘文芸誌 四月号目次

治・法両院を通過す! (*詩)

日本無產階級文芸作家聯盟短見

階級線に於ける個人の自覚と責任

今野氏の釈明に關して先輩に云ふ

無產階級の立場から新井紀一によせて前期ブ

ロ作家に与ふ

太郎兵衛さん

青年よ闇黒の中にかの「一つの見えざる手」

西村三郎

西村三郎

本郷一郎訳

山本伊津雄

阪田紳一郎

英耿

大正十四年四月一日発行

英耿

阪田紳一郎

を意識せよ (*詩)

旗をふせよ — 同人諸兄に — (*詩)

先輩よ、少年よ、同志よ (*詩)

曾て勇者たりし者達／少年よ／彼の旗の下
に／黄昏れる田舎／街にて／行進のうた

来るべき時／あらし／一つの生命 (*詩)

近事一束

埋め草

無產階級文化研究所設立について

お前らのやりかた

覚悟を要す

編輯後記

〔奥付〕

(広告) 希望閣 「ロシアに入る」 他

(広告) 『解放新聞』

山本

瓜田新

北見與志

岩崎一

山本伊津雄

西村三郎

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

12 13 13

錢。第一卷第五号、十五錢（但し奥付には定価二十五錢とあり表紙に「特価十五錢」とある）。第二卷第一号以降、二十錢。ページ数も

当初は五十頁台であったが、第一卷第五号以降、三十頁台に減少し。大売捌所は、初め東京堂、北隆館、東海堂。第一卷第二号で北隆館が脱けて第一卷第三号から上田屋が加わる。第一卷第五号以降、上田屋が消えて北隆館が復活する。第一卷第三号は発禁（翌号表紙に「前号発売禁止」とある）。第二卷第三号以降、表紙に「無産階級文芸雑誌」と入る。

『日本近代文学大事典』第五巻の「戦闘文芸」（項目執筆者・中島国彦）によれば、「第一早稲田高等学院グループの同人誌で、海外の進歩的文学運動や表現主義の影響のもと、「階級意識の高調」「心理と戦闘への文芸」を志向した」とされる。文壇的にはほとんど無名の若者たちによる先駆的なプロレタリア文芸誌の一つで、『文芸戦線』にひと月遅れて創刊された。

第一巻第三号の「弁明」（署名）では、表紙のデザインが『文芸戦線』の「モホー」という声に反論し、表紙は『赤旗』の「ヘウセツ」と告白している。また同記事では、「誌名に於て諸君に敬意を表して、『文芸戦線』の名を譲つたと主張されている。また、第一巻第五号には『文芸戦線』対『戦闘文芸』の野球対戦の成績があり、「平均年齢文戦三十一、戦闘二十一、試合結果は一〇対一四」とあるように、先輩格の文戦同人に対する公私にわたる対抗意識がうかがえる。

『文芸戦線』は大正十四年二月から五月まで休刊したが、この頃から、岩崎一（英耿）は『戦闘文芸』誌上において、プロレタリア文學者の統一組織の結成を主張した。この主張は同誌の休刊後、復刊した『文芸戦線』誌上においてつづけられた。

（関連文献）

英耿「無産派文芸運動の危機とその新方向」（『戦闘文芸』大正十四年二月）
英耿「治安維持法案と社会運動上に於ける戦線的統一の必要」（『戦闘文芸』大正十四年三月）

岩崎一「日本無産階級文芸作家聯盟短見」（『戦闘文芸』大正十四年四月）
岩崎一「分り切つた事 そして実行出来ぬ事（無産作家聯盟のABC）」（『文芸戦線』大正十四年六月）

岩崎一「文芸の戦野に於ける青年運動 全国青年文芸聯合」（『文芸戦線』大正十四年七月）
岩崎一「本来の立場に帰れ——先輩諸兄に呈するの文」（『文芸戦線』大正十四年八月）

『戦闘文芸』四月号には、「無産階級文化研究所設立について」という一文（署名）が掲載されており、『文芸戦線』七月号の岩崎の文章「文芸の戦野に於ける青年運動 全国青年文芸聯合」の末尾には、「プロレタリア文化研究所にて」と記されている。さらに『文芸戦線』大正十四年十二月号の岩崎一「美学其他に関する書簡」にも、「僕達研究所の同人」という文言がある。「研究所」としての実態は不明であるが、彼の意識が「文化」運動にあつたことを示している点では興味深い。

この間、『文芸戦線』同人の側からの反応は鈍かつたが、七月初旬、岩崎一が自宅に山田清三郎・林房雄らを招き、ようやく話が具体化していくこととなる（山田清三郎「聯盟に就て」『文芸戦線』大正十

（村田裕和）

四年九月号）。ただし、すでに大正十四年一月号の『文芸戦線』には、コミニテルンによる「国内的組合」結成の呼びかけが掲載されており、「文芸戦線」同人たちの側にも、統一組織の必要性は十分に認識されていた。

その後『文芸戦線』八月号に山田清三郎の「文芸家と社会生活（無産派文芸家聯盟の要）」が掲載され、聯盟の必要が説かれた。この記事の中でも、「今また岩崎一君などが盛に我々に懇意してゐる無産派文芸家聯盟には、僕も全然賛成である」とある通り、十月四日に発起人会が開催され、十二月六日に創立された「日本プロレタリア文芸聯盟」の眞の立役者は岩崎だった。岩崎は文芸聯盟の世話人、「規定草案」起草委員などに選任されており、聯盟の中心に位置を占めていたことがうかがえる。

同年の『文芸戦線』九月号には、休刊前の『戦闘文芸』のコラム欄「散弾（当る……当らぬも……）」が掲載されている（無署名だが岩崎だろう）。ここには、文芸聯盟による運動について、「映画も作れ百姓芝居もやれ。小牧さん、スポーツもやりませうよ。くげぬま下んだりから、足袋はだして出てらっしゃい」とあり、世俗的な大衆文化運動を模索しようとしていたことがうかがえる。『文芸戦線』の休刊から復刊そして日本プロレタリア文芸聯盟の設立という大正十四年の動きの中で、『戦闘文芸』および岩崎一は、統一組織結成を促しつつ『文芸戦線』へ合流していくという過程をたどった。だが、岩崎の文化運動はこれ以上の展開を見なかつた。

大正十五年三月号の第二次『解放』の文芸聯盟批判の特集に岩崎や『戦闘文芸』旧同人の北見與志の名前が見えることから、岩崎らは急速に運動の中心から遠ざかった（遠ざけられた）ようである。その後の『戦闘文芸』同人たちの動向は定かではない。

『尖銳』

日本無產派文芸聯盟本部發行

昭和三年六月～八月（全三冊）

尖銳 *3

皮かむり人道主義者細田民樹其他

疝氣（戰旗）で病む

近頃流行のお題目

顛落作家を葬れ

山清之を見よ

本聯盟状勢報告 *4

断ち切れぬ縄（＊小説）

鎖片（＊小説）

白痴の娘（＊小品）

檻を出る（＊戯曲）

「尖銳」欄募集

編輯後記 *5

〔表紙〕

〔広告〕千葉命吉『一哲学者の世界遊記』（平凡社）

綱領・規約 *1

日本無產派文芸聯盟

〔1〕

〔2〕

〔3〕

木村生	越中谷利一	大河原浩	大木雄三	越中谷利一	島影盟	光成信男	木村春樹	秋哲夫	原田仙二郎	中西伊之助	江口渙	4
30	31	31	30	29	29	28	28	28	29	29	35	7、
29	28	28	28	29	29	28	28	28	29	29	35	〔表1〕
28	27	27	27	26	26	25	25	25	25	25	35	〔表2〕
27	24	21	20	19	18	16	14	11	8	7	35	〔表3〕
27	24											

〔目次〕

明日の文学

統一合同問題の誤謬

分裂派の前田河・紳士

ゴシップ闘争

麻生義・松本の尚早論批判

彼等を没落せしめよ

大瞬間へ（＊詩）

朝（＊詩）

眼を閉ぢて描く（＊詩）

河上肇さんのことども

ロシヤ新社会文学の源泉

究一演劇革命

第二回文芸研究会（＊告知）

島影盟

27 24 21
27 24

山本勇夫

細野孝二郎

大道寺浩一

相本清三

尾瀬敏止訳

— ゲルツエンの研究
ペ・エス・コーガン著

27 24 21
27 24

江口渙

秋哲夫

原田仙二郎

中西伊之助

27 24 21
27 24

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

〔奥付〕

〔広告〕中西伊之助『創作熱風』（平凡社）

65
〔表3〕
〔表4〕

*1 綱領には、「一、我等は正統無產階級文芸の樹立を期す。／一、我等は資本主義文芸を排撃す／一、我等は無產階級解放運動の文化戦線に立つ。」とある。規約は「昭和三年四月廿二日」から施行するとある。

*2 「市外戸塚諷訪七三」で五月二七日開催。

*3 文壇時事批評。各記事のタイトルは目次より補つた。

*4 「本聯盟が「解放」と袂別してより直ちに機関誌を発刊する筈のところ「解放」当時の聯盟員の中に種々な暗中策動者が生じた為め、進捗せず休憩があつたが、其後熱烈なる有志等によつて準備会を組織し数次会合の上機関誌發

刊の速進を謀る。／三月十三日本郷燕軒に於いて開かれた日本左翼文芸家総聯合に本聯盟も参加し、当日の大会に江口渙君外二十五名出席。／四月五日本部を便宜上解放社から現所に移し、第一回仮準備会を開き、仮編輯委員に江口渙、大木雄三、光成信男、越中谷利一、大河原浩の諸君を挙ぐ。」などとある。以後、四月二十二日に春季総会が開かれ、前記仮編輯委員五名に島影盟を加えた六名が新執行委員に選ばれた。

* 5 聯盟員「七十有余名」とある。

刊の速進を謀る。／三月十三日本郷燕軒に於いて開かれた日本左翼文芸家総聯合に本聯盟も参加し、当日の大会に江口渙君外二十五名出席。／四月五日本部を便宜上解放社から現所に移し、第一回仮準備会を開き、仮編輯委員に江口渙、大木雄三、光成信男、越中谷利一、大河原浩の諸君を挙ぐ。」などとある。以後、四月二十二日に春季総会が開かれ、前記仮編輯委員五名に島影盟を加えた六名が新執行委員に選ばれた。

何ばんやりしてゐるんだ（＊詩）
日記より

反●●●●的作品行動へ！

農民に結びつける！

断々乎として反対しろ

隊長の訓辞

流血の歴史に抗議して

レーニンの進出

原稿募集

尖銳 *1

お坊ちゃんのたわ言

迷路深入

作品行動へ、行動へ

山内謙吾の作品

三ツ子の魂

『戦争に対する戦争』を読む

殺人光線（ネオ・メロドラマ）（＊戯曲）

追放者（エロシエンコの追放記による）（＊戯曲）

秋田雨雀氏訪露講演（＊案内）

爆破（＊小説）

古い疵【其の一】（＊小説）

編輯後記

（広告）左翼文芸家総聯合編『戦争に対する戦争』（南宋書院）

古い疵【其の一】（＊小説）

編輯後記

（広告）左翼文芸家総聯合編『戦争に対する戦争』（南宋書院）

古い疵【其の一】（＊小説）

（広告）左翼文芸家総聯合編『戦争に対する戦争』（南宋書院）

古い疵【其の一】（＊小説）

捲き起る砂塵の上に

（＊詩）

腰山總七

原田仙二郎

秋哲夫

正宗白鳥論

何故我々は彼を排撃するか――

大河原浩

解放運動犠牲者救援会に即時加入せよ

文芸戦線は果して

正統左翼たり得るか！

――

越中谷

其の声や空なり

〔目次〕

〔表紙〕
〔広告〕野口米次郎『日本美術読本』（平凡社）、石井柏亭『西洋美術読本』（平凡社）、
〔凡社〕
〔表1〕
〔表2〕
〔表3〕
〔表4〕

24	21	14		13	7	4	〔表1〕	〔表2〕	〔表3〕	〔表4〕
5	5	5		5	5	5				
25	23	20		13	6	6				

* 1 各記事のタイトルは目次より補った。

佐藤英昌	大木雄三	越中谷利一	大河原浩	島影盟	山本勇夫	光成信男	佐々木弘之	島影・光成	佐々木弘之	島影	59	57	56	53	37	36	35	35	34	34	33	32	31	30	29	27	26	25		

第一卷第三号 昭和三年八月一日發行

八月号

瘦せた獣 (*詩)
見る生命の真理を！ (*詩)

旋風

争議の跡
ベンを磨け (*詩)

廻れ右だ (*詩)

夏の生活から (*詩)

坂本久生
柴田明夫
脇田務

山本勇夫
大道寺浩一
細野孝二郎

坂本久生
柴田明夫
脇田務

〔表紙〕

(広告) 野口米次郎『日本美術読本』(平凡社)、石井柏亭『西洋美術読本』(平

〔表2〕

凡社)

〔目次〕

編輯前記

無產大衆と文学

プロレタリヤ文学に対する過程的批評の基準

江口渙
大河原浩

原田仙二郎
光成信男

秋哲夫
越中谷利一

大河原浩
光成信男

佐藤英昌
村田千秋

佐々木弘之
津本武雄

佐々木弘之
渡邊伍郎

佐々木弘之
倉光賢治

佐々木弘之
久保田宏

佐々木弘之
佐藤英昌

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表5〕

〔表6〕

〔表7〕

〔表8〕

〔表9〕

〔表10〕

〔表11〕

〔表12〕

〔表13〕

〔表14〕

〔表15〕

〔表16〕

〔表17〕

〔表18〕

〔表19〕

〔表20〕

〔表21〕

〔表22〕

〔表23〕

〔表24〕

〔表25〕

〔表26〕

島影盟

北村洋吉

渡邊寛

越中谷利一

大河原浩

秋哲夫

二人将校

一人の警告

プチブル感情を棄てろ

政治小説私見

尖銳
*2

戦旗への注文等

新聞記者の魂

誰か鳥の雌雄を知らんや

隨筆・感想

二人将校

大河原浩

光成信男

越中谷利一

秋哲夫

秋哲夫

秋哲夫

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

島影・光成

江口渙

大河原浩

原田仙二郎

光成信男

秋哲夫

* 2 各記事のタイトルは目次より補つた。

日本無産派文芸聯盟本部版『尖銳』について

昭和三（一九二八）年六月一日創刊。同年八月号まで全三冊。日本無產派文藝聯盟機關誌。菊判（縦20ミリ×横150ミリ）。歐文題号「OCT-POTA」。ロシア語で octopis は「切れ味」「鋭さ」の意。二号まで表紙に掲載。編輯兼發行人、光成信男（創刊号は「信夫」と表記。住所なし）。發行所、日本無產派文藝聯盟本部（東京市外高田町雜司ヶ谷三〇）。印刷所、株式会社正明会（東京市外池袋九二四）。印刷人、片岡懋。定価は十五錢。表紙、第二号・腰山七之助、第三号・本聯盟美術部。創刊号表紙に「無產階級文藝雑誌」、第二号表紙に「反・・・・作品行動へ」、第三号表紙に「無產階級大衆文藝論号」とある。

大正十五年十一月十四日、プロレタリア文芸聯盟は第二回大会を開き、日本プロレアリア文芸聯盟（プロ芸）に改組した。改組あたり、非マルクス主義者が排除された。この内、無政府主義者とそれに近いグループは、翌年、昭和二年一月に『文芸解放』を創刊した。また農民文学者たちは、農民文芸会を結成し、やや遅れて昭和二年十月に第一次『農民』を創刊した。この間の、昭和二年六月九日には、プロ芸を除名された十六名が、『文芸戰線』を持って脱退し、労農芸術家聯盟を結成している。

こうした過程の中で、プロ芸の動向と相容れない者たちを広く集めて結成されたのが「日本無產派文芸聯盟」である。結成（発起人会）は昭和二年四月二十二日で、中心人物は小川未明・江口渙・村

松正俊らであった。結成後、同聯盟は第二次『解放』を機關誌とした。第一次『解放』は、大正十四年十月（第四卷第一号）に同人制作でスタートしたが、実質的な經營者は山崎今朝弥であった。同誌についての詳細は『現代日本文芸総覽』補巻（明治文献、一九七三年）の解題を参照されたい。

日本無產派文芸聯盟は、昭和二年六月号から昭和三年一月号まで『解放』を機關誌とした。しかし、山崎が日本労農党の支持団体になることを雑誌提供の条件としたため、聯盟は『解放』と袂を分かつこととなり、その結果『尖銳』が創刊されたのである。

創刊号の『本聯盟状勢報告』に、「本聯盟が『解放』と袂別してより直ちに機關誌を発刊する筈のところ『解放』当時の聯盟員の中に種々な暗中策動者が生じた為め、進捗せず休態の有様であつたが、其後熱烈なる有志等によつて準備会を組織し数次会合の上機關誌発刊の速進を謀る。」／三月十三日本郷燕軒に於いて開かれた日本左翼文芸家總聯合に本聯盟も参加し、当日の大会に江口渙君外二十五名出席。／四月五日本部を便宜上解放社から現所に移し、第一回仮準備会を開き、仮編輯委員に江口渙・大木雄三、光成信男、越中谷利一、大河原浩の諸君を挙ぐなどとある。

以後、昭和三年四月二十二日に春季總会が開かれ、前記仮編輯委員五名に島影盟を加えた六名が新執行委員に選ばれた。右の報告にも記されているように、昭和三年三月十三日に「左翼文芸家總聯合」が結成されたが、その後、三・一五事件をへて、三月二十五日にプロ芸と前衛芸術家同盟が合同して、全日本無產者芸術聯盟（ナップ）が設立された。四月二十八日には「左翼文芸家總聯合」に参加していた闘争芸術科聯盟と左翼芸術同盟が解体し、ナップに合流する。すでに成立していた労農芸術家聯盟と対峙する形で、急速にナップ

へと勢力が集中されていく中で、統一戦線「左翼文芸家総聯合」は空中分解したのである。

日本無産派文芸聯盟では、四月以降「内藤辰雄・中西伊之助・外三名が脱退」（第三号の「本聯盟状勢報告」）し、江口涣・光成信男・越中谷利一らが中心メンバーとして残つた。日本無産派文芸聯盟は、ナップ対文戦の対立構図に従つて引き裂かれ、ナップを支持する残留者たちが『尖銳』を刊行したということになろう。誌面には『文芸戦線』への厳しい批判が多く、『戦旗』寄りの立場が鮮明にされている。八月号には特に終刊の断りではなく、これが最終号かは判然としない。しかし、右の三名はいずれもナップに参加しており、最初に『戦旗』に執筆した越中谷利一の「戒厳令と兵卒」は昭和三年九月号（第一巻第五号）に掲載されていることから、八月号で最後になつたものと思われる。創刊号がすでにナップ結成以後であることから、思想的には複多な要素を含みつつも、江口らにとつてはマルクス主義への転向の最終過程をたどりつあることをナップ側にアピールする舞台となつた。

国立国会図書館（東京本館）所蔵本を参観した。

（村田裕和）

時代文化

時代文化社発行

昭和四年六月（昭和五年五月）（全九冊）

『時代文化』
時代文化社発行
昭和四年六月～昭和五年五月（全九冊）

村口の一本松より（*詩）
動物園で――（*隨想）
資本主義と機械（*隨想）
ロシア映画のイデオロギーと実際
白坂篤人
丸山義二
十時三郎
47 45 42
ゞゞゞ
48 47 44

村口の一本松より (*詩)
動物園で―― (*隨想)
資本主義と機械 (*隨想)
ロシア映画のイデオロギーと実際

白坂篤人
丸山義二
十時三郎

白坂篤人
丸山義二
十時三郎

白坂篤人
丸山義二
十時三郎

第一卷第一号 招和四年六月一日發行

六月創刊號

〔表紙〕

(应告) 片山正雄著『雙解獨和大辭典』『雙解獨和小辭典』

目次

卷之三

ブルジョア社会学の方法論 —今中氏の所論

加賀野美市

綱領草案の第一篇の若干の問題について — *1

芸術の社会的価値とその藝術的法則の問題其

他——文芸時評

心座その他
—演劇時評—

貧乏人の埋葬

ピスカトールとベルリン民衆劇場（一）

島上千一 33 39、 56

冒頭に「総領委員会に於ける同志ブハーリンの演説のうちより」とある。

「無産階級運動は反動の荒波の中に、困難な、しかし、力強き闘争を続けてゐる。われ／＼はこの意義ある時にあたつて、文化戦線上の諸問題を問題とし、われ／＼の出来うるかぎりの技術を提供して、与へられた任務を果たすことを盟ふ」とある。

トーンファイルム論	オレツク・ヴォイノフ、大塩岐久雄訳	49	
ホフマン・ハルニツシユ、水町三郎訳	50	52	
堤を行く救済婦人会（鉛毒事件の一節）（*小説）	高見順	53	
出産（*小説）	島上千一	54	
正道を行く（其一）（*小説）	柴田賢一	55	
伯林と戦線 四幕（*戯曲）	町田純一	56	
編輯後記 *2	編輯部	57	
（奥付）		58	
（広告） 中島ベーカリー		59	
（広告） マリー・ストーブス著、馬島備訳『避妊の研究』（平野書房）	〔表3〕	60	
（広告） 岩波文庫最新刊	〔表4〕	61	
7 6 4 3 2 1 〔表1〕 〔表2〕	100 99 99 82 76 69 〔表3〕	98 81 75 68 95 84 73 67 92 81 70 65 90 79 68 62 88 77 66 61 86 75 64 59 84 73 62 57 82 71 60 55 80 69 58 52 78 67 56 50 76 65 54 49 74 63 52 43 72 61 50 42 70 59 48 41 68 57 46 39 66 55 44 38 64 53 42 37 62 51 40 36 60 49 38 35 58 47 36 34 56 45 34 33 54 43 32 31 52 41 30 29 50 39 28 27 48 37 26 25 46 35 24 23 44 33 22 21 42 31 20 19 40 29 18 17 38 27 16 15 36 25 14 13 34 23 12 11 32 21 10 9 30 18 7 6 28 16 5 4 26 14 3 2 24 12 1 0	49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

第一卷第二号 昭和四年七月一日発行

七月号

ヘルマン・ヒーベル、藤林秀雄証

與吉の作文 (*小説)

丸山義二

畦の約束 (*小説)

白坂篤人

〔表紙〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表1〕

〔表2〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表1〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表2〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表3〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表4〕

〔広告〕『ゴルキー全集』(共生閣)

〔広告〕「第三十二回夏期講習会」(独逸語専修学校)、『独逸語学雑誌』(日独書院)

〔表3〕

ホフマン・ヘルツシユ、水町三郎訳

ボフマン・ヘルツシユ、水町三郎訳

〔広告〕『国際文化』九月号 (白揚社)

市ヶ谷刑務所 橋×一×

映画のイデオロギー的考察

焦熱地獄の解放運動の犠牲者と犠牲者に対する労働者農民の支持！	檻の低級闘士——同志Nにおくる——	（＊小説）	高見順	6
白色●●●（＊詩）	——獄中の友へ	* ²	玉独清、白坂篤人訳	20
炭坑の土佐犬	（＊小説）	亀戸事件日記	救援会	21
途に艶る（＊小説）	戦雲【十四場】（＊戯曲）	町田純一	救援会	19
ソヴィエートウクライナの文学	（コラ・チャエレシュチエンコ、島上千一訳	水町三郎	南葛労働会	
映画『セントペテルブルグ』の最後に就て	* ³	増田操	救援会	
ロシア詩の展開に関する書覚	* ⁴	大塩岐久雄訳	町田純一	
大衆の顔（＊隨想）	ドビツチユ＝ヤルモリンスキ、杉村保訳	貴司山治	救援会	
獄中だより（一通目、「谷×様 大×積」、二通目「徳×球×」、三通目「谷×兄 岩×義×」、四通目「市ヶ谷刑務所 中×義×」、五通目「市ヶ谷刑務所 渡×健×」、六通目「市ヶ谷刑務所 杉×文×」、七通目「市ヶ谷刑務所 金×鎮」、八通目「東京衛戌刑務所 山×隼×」「浅××子様」、九通目「市ヶ谷刑務所 ×浦×五郎」、十通目「市ヶ谷刑務所 橋×省×」、十一通目「市ヶ谷刑務所 金××」、十二通目「市ヶ谷刑務所 ×本×男」、十三通目「牛込刑務所 ×坂×」、十四通目「市ヶ谷刑務所立×清」、十五通目「谷×兄 清×平×郎」）	82 73 87 81	71 73 71	68 54 39 38 22 38	20 21 21 38

目次には「白色テロル」とある。

「これは救援会が獄中の同志へ送つた手紙で、同志はこの書信にどう答へたか。」

* 1
* 2
目次には「白色テロル」とある。
「これは救援会が獄中の同志へ送った手紙の中の一つだ。そして同志はこの書信にどう答へたか。」

* 3 本文には「ゼント・ペテルスブルグの最後」とある。
* 4 末尾に「ロシア詩集、一九二七年」より」とある。

* 5 「ヴ」は「ワ」に濁点。
* 6 「ベルリンにて」とある。

第一卷第四号 昭和四年十月一日発行

十月号

〔表紙〕

〔広告〕『国際文化』十月号（白楊社）

〔広告〕『獨和対訳 ハルツ紀行』ほか（南山堂書店）

〔目次〕

〔広告〕中島ベーカリー、甘酒屋喫茶店

〔扉〕

* 1

暴風（-*小説）
ハンガリーノム（十月の歴史から）

前進

モーテーの歌（-*詩）

雨（-*詩）

愛國者の前提（-*詩）

十月の心臓（十月／伝單／再び十月）

露霧（-*小説）

芸術変化の内的法則と社会的条件
——谷川徹

三氏の所論を契機として——

我がプロレタリア文学は今如何なる段階に立

安田義一

73	50	48	47	47	31	30	6	5	4	1	〔表1〕
82	72	49			47	47	30		2	3	〔表2〕
											〔表2〕

南野定正

フレデリック・カヴァ

柴田賢一

第一卷第五号 昭和四年十一月一日発行

十一月号

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表紙〕
〔広告〕『山本宣治全集』（ロゴス書院）

〔奥付〕
〔編輯後記〕

ロシア教育制度の概観

英國教員労働同盟、杉村保証

編輯局

つか *2
独逸のプロレタリア演劇〔3〕ピスカトー
ル、民衆劇場及びカ・マルティン 島上千一

赤い英雄たち（-*小説） *3
デイ・フウルマーノウ、十時三郎訳

〔表3〕

鈴木厚

83
85
92

〔表4〕

〔表3〕

〔表3〕

〔表3〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表5〕

〔表6〕

〔表7〕

〔表8〕

〔表9〕

〔表10〕

〔表11〕

〔表12〕

〔表13〕

〔表14〕

〔表15〕

〔表16〕

〔表17〕

〔表18〕

〔表19〕

〔表20〕

〔表21〕

〔表22〕

〔表23〕

〔表24〕

〔表25〕

〔表26〕

〔表27〕

〔表28〕

〔表29〕

〔表30〕

〔表31〕

〔表32〕

〔表33〕

〔表34〕

〔表35〕

〔表36〕

〔表37〕

〔表38〕

〔表39〕

〔表40〕

〔表41〕

〔表42〕

〔表43〕

〔表44〕

〔表45〕

〔表46〕

〔表47〕

〔表48〕

〔表49〕

〔表50〕

〔表51〕

〔表52〕

〔表53〕

〔表54〕

〔表55〕

〔表56〕

〔表57〕

〔表58〕

〔表59〕

〔表60〕

〔表61〕

〔表62〕

〔表63〕

〔表64〕

〔表65〕

〔表66〕

〔表67〕

〔表68〕

〔表69〕

〔表70〕

〔表71〕

〔表72〕

〔表73〕

〔表74〕

〔表75〕

〔表76〕

〔表77〕

〔表78〕

〔表79〕

〔表80〕

〔表81〕

〔表82〕

〔表83〕

〔表84〕

〔表紙〕
〔広告〕『勤労教育』（隆文館）
〔広告〕『獨逸バーフレダルマウス』
〔目次〕
〔広告〕『新興映画』十一月号（新興映画社・共生園）
〔扉〕 * 1
プロレタリア文学は集団的生産方法によらねばならない

貴司山治

6	5	4	2	1	〔表1〕
9	3	3	2	1	〔表2〕

醸造工（その一）

夜から夜まで

共同作業組（*詩） *2

霹靂 その二（*小説）

巡洋艦ガングート号——三幕十一景——

赤旗へ（二）——独逸革命家の自伝——

マクス・ヘルツ、島上千一訳

或る男（*詩）

ベズイミヨンスキーの芸術を紹介す

ベ・エス・コーカン、尾瀬敬止訳

「西部戦線異状なし」を読まない人々のため

に

ソヴェート教育の実際——上—— *3

英國教員労働同盟、杉村保訳

ジャン・ネット・マアールの『十三日間』に

ついて

白坂篤人 高見順

點菜の数句

詩集「ペリカン」 *4

ソヴェート農村青年に与へたる十月革命の影響

国際××青年同盟執行委員会版、水町三郎抄訳

【中露における図書館の数】

赤い英雄たち【長編第三回】

デイ・フルマーノフ

【ソヴィエトにおける新聞取扱割合】

プロレタリア芸術の大衆化の問題

編輯後記

〔奥付〕

〔表4〕

〔広告〕『山本宣治全集』（ロゴス書院）

丸山義一 柴田賢一 デム・マアファイ 高見順 町田純一

柴田賢一

デム・マアファイ

高見順

町田純一

マクス・ヘルツ、島上千一訳

ゲエル・ウイルヘルム

ベ・エス・コーカン、尾瀬敬止訳

「西部戦線異状なし」を読まない人々のため

に

ソヴェート教育の実際——上—— *3

英國教員労働同盟、杉村保訳

ジャン・ネット・マアールの『十三日間』に

ついて

白坂篤人 高見順

點菜の数句

詩集「ペリカン」 *4

ソヴェート農村青年に与へたる十月革命の影響

国際××青年同盟執行委員会版、水町三郎抄訳

【中露における図書館の数】

赤い英雄たち【長編第三回】

デイ・フルマーノフ

【ソヴィエトにおける新聞取扱割合】

プロレタリア芸術の大衆化の問題

編輯後記

〔奥付〕

142

『小都會』の後言) (*詩)

ソヴェートの電化事業

C・H・ダグラスの「信用機関の社会化」

ベジイミヨンスキ詩集——尾瀬氏訳を読む

立体と平面

S村の話

養蚕を見よ

赤旗へ(二)

——独逸革命家の自伝——

ソヴエート教育の実際(下)

マクス・ヘルツ、島上千一訳

英國教員労働同盟、杉村保訳

荒れる海を(*詩)

第一ラミー争議 短歌 *1

森山啓、岡部文夫

ブロンクス公演のきのこ(イースト・サイド

回想記から)(*小説) *2

マイケル・ゴオルド、高見順訳

紹介を機縁として *3

リガとシカゴ(*小説)

ジョン・リード、向山久哉訳

何を約束してくれるか——或る少年脱走者の

話——(*小説)

渡邊好文

編輯後記

(奥付)

(広告)

社

*1 短歌であるが短詩とするほうが正確。

*2 「きのこ」に傍点。

尾瀬敬止訳

白坂篤人

安田義一

町田純一 水町三郎 柴田賢一

町田純一

水町三郎

柴田賢一

*3 「マイケル・ゴオルドはアメリカの「戦旗」ともいふべき「二ユーマツセズ」の編輯者です」とある。近代文学館所蔵

本は71~74頁切除。

第二年第二号 昭和五年三月一日発行

三月号 創作特輯

〔表紙〕
(広告) 喫茶・酒場ミモーサ

〔扉〕
(広告) 中島ベーカリー、井上洋服店

〔目次〕
(広告) 『短歌前衛』三月号

〔表紙〕
(広告) 図書館 (*小説) *1

〔扉〕
(広告) 愛国製菓会社 (*小説)

〔表紙〕
(広告) 平原の陰影 (*小説)

〔扉〕
(広告) どろぼう (*小説)

〔表紙〕
(広告) ピツチ労働者の叫び (*小説)

〔扉〕
(広告) 画工リュウチコフ (*小説)

〔表紙〕
(広告) ある借地人群 (*小説)

〔扉〕
(広告) ゴー・ストップ (*隨想)

〔表紙〕
(広告) こんな代議士 (*小説)

〔扉〕
(広告) 金時計物語 (*小説)

〔表紙〕
(広告) 或日の遺族 (*小説)

貴司山治 高見順 丸山義二 水町三郎 町田純一 田口運 松永延造 野村愛正 丸山義二 十時三郎 白坂篤人 柴田賢一
〔表1〕 〔表2〕 〔表3〕 〔表4〕

99 87 79 78 74 69 67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
87 79 78 74 69 67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
79 78 74 69 67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
74 69 67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
69 67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
67 53 44 32 19 6 5 4 2 1
53 44 32 19 6 5 4 2 1
44 32 19 6 5 4 2 1
32 19 6 5 4 2 1
19 6 5 4 2 1
6 5 4 2 1
5 4 2 1
4 2 1
2 1
1
〔表1〕 〔表2〕 〔表3〕 〔表4〕

貞操と草鞋 (*小説)

渡邊好文

(広告) 石川哲『吾等の祖先は猿か』ヒレーラ・ベロツク著、石川哲訳

『ウ

夜業の後／轢重輸卒／船のベンキ工 (*短歌一首) 逗子八郎

106

118

117

文学的戦術論 — 大宅壮一氏の著書 —

丸山義二

120

119

121

124

125

124

121

123

130

124

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

入学。九月、同人誌『文芸交錯』を創刊した。また、昭和三年二月五日に壺井繁治・三好十郎らが結成した左翼芸術同盟に参加し、本格的にプロレタリア文学運動に関わった。この同盟は「アナーキストの転換者の集まりといふ印象」（『昭和文学盛衰史』）であつたという。同年四月二十八日、同盟は解散してナップに合流し、高見もマルクス主義へと転換する。在学していた東大では、『文芸交錯』を含む七つの同人誌が一齊に廃刊し、同年七月、『大学左派』（昭和三年七月～四年二月）が創刊された。高見は、池田寿夫・木村利美らとともにこれに加わった。同誌は翌昭和四年六月に後継誌『十月』（昭和四年六月～十二月）となり、ナップの公式主義を批判する立場をとる。『時代文化』はこの『十月』と同年同月に創刊された。力を分散してしまうにもかかわらず、『十月』と同時に創刊された理由ははつきりとしない。『時代文化』のあと、高見らは『集団』（昭和五年七月～七年六月）を創刊する。

高見順の他、執筆陣は、町田純一（渋川驍）・柴田賢一・木村利美

・辻子八郎など東京帝大的学生・卒業生らが中心で、そこに貴司山治・大宅壯一・森山啓・丸山義二らが協力するようなかたちとなっている。第二年第二号の創作特輯には田口運藏・松永延造・野村愛正も寄稿しており、文戦派・非マルクス主義者にも門戸を開いている。こうした寄稿家たちの顔ぶれからも、『時代文化』がナップの硬直したイデオロギーとは異なる立場で、プロレタリア文学を模索していくことがうかがえる。

何度も登場する貴司山治は、当時『ゴー・トップ』で人気を博していた。だが、貴司はそれがあだとなつて作家同盟中央委員会にたびたび呼び出されて意見聴取される。さらに、中央委員会から指示され、昭和五年四月六日の作家同盟第二回大会で「芸術大衆化」

に関する提案書を提出した。詳細は本誌前号付録（注1）にゆずるが、要するに貴司の主張は、議論を「まんとするよりも、大衆をとりこにする面白い作品を書け」ということにつきる。これに対しても、中央委員会は実質的に芸術大衆化を否定しつつ、「芸術運動のボリシエヴィキ化」と舵を切る。当時、藏原惟人自身が、「藏原派」もなければ「貴司派」もなければ、ナップ分裂の兆候などは尚更あり得ようはずはない」（注2）と火消しに回らねばならなかつたほど、影響は深刻だつた。おそらくそれは貴司の大衆的人気ばかりではなく、高見順ら、若手同盟員への影響が看過できなかつたことも一因だつたのではなかろうか。『時代文化』は、右の第二回大会が開催され、佐藤耕一＝藏原惟人の「ナップ」芸術家の新しい任務——共産主義芸術の確立へ（『戦旗』昭和五年四月）が発表された翌月の五月号が現在確認しうる最終号となつてゐる。

日本近代文学館所蔵（高見順旧蔵）本および日本大学総合学術情報センター所蔵本を参考した。なお、日本近代文学館所蔵本の内、第二年第一号および第二号の一部に切除箇所がある。前者は日本大学総合学術情報センター所蔵本、後者は九州大学中央図書館所蔵本（当該箇所のみ複写）により補つた。

（村田裕和）

注1

伊藤純「日本プロレタリア作家同盟第二回大会貴司山治筆提案書」（『フェンレス』第四号、オンライン版特別付録「一〇一六年九月」参照。http://senryokaitakki.com/fencelless004_15.pdf

注2

藏原惟人「芸術大衆化の問題」（『中央公論』一九三〇年六月）。

